

メソジスト・ウーマンの伝道事業と教育

明治維新一五〇年にあたる今年は、奇しくも、青山学院女子短期大学の現代教養学科と子ども学科の学生募集が最後となる節目に重なっています。日本の教育の近代化をもたらしたミッション・スクールの使命と課題が改めて問われる中、メソジスト・ウーマンの伝道事業と教育に焦点をあて、その史的意義について触れてみたいと思います。

青山学院の教育はアメリカのメソジスト 監督教会女性海外伝道協会 (The Woman's Foreign Missionary Society: The Methodist Episcopal Church: W F M S) から派遣された女性宣教師ドーラ・E・スクーンメーカーによって始められました。

教会が一七八四年に確立後、メソジスト 監督教会の女性グループは、十九世紀後半に先の W F M S、並びにその相補団体として、女性国内伝道協会 (The Woman's Home Missionary Society: W H M S) を組織しました。W F M S はインドで宣教活動した宣教師の妻の熱情から、一八六九年にボストンのトレモント・ストリート教会において誕生しました。そのいきさつは、ロイス・パーカーとクレメンティナ・バトラの二人の女性が、インドのヒンドゥー・ジェンダー・イデオロギーに縛られた女性に対して、男性宣教師の力では及ばず、女性だけが女性に接近できるという経験から、ルイス・フランダース夫人の協力を得、八名で組織を立ち上げました。創設されて一年も経たないうちに、インドに二名の独身の女性宣教師が派遣されています。

他方、一八八〇年に結成されたアメリカ本国の W H M S は、海外の異教世界だけでなく、国内の新規移民の置かれた状況に目を向けました。ニューカマーの宗教がプロテスタン

一八七四年に開かれた女子小學校は、翌年、救世学校と改称、一八七七年には築地の校舎に移転して、校名も海岸女学校と改められました。海岸女学校は東京ホームと呼ばれ、この場所が伝道と教育の拠点となり、女学校の教育だけでなく、日曜学校、聖書クラス、婦人集会等を通して伝道活動がなされました。

いわゆる十九世紀アメリカ女性の社会改革運動は、男性の活動と分離した空間で企てられ、シスターフッドの絆によって進められました。特筆すべきは、他教派に比べて、メソジスト派には女性のリーダーシップと女性グループ提携の強力な素地があつたことです。メソジスト・コネ

トではなかつたために、プロテスタント教会は外国生まれの人々を置き去りにし、移民の密集する地区で奉仕する人はほとんどいませんでした。こうしたアメリカ社会の中で、教会の内外において女性の担う役割が自覚され、メソジスト・ウーマンは人々の精神的・物質的欠乏と苦しみにもつと近づいて寄り添わなければならぬという思いで活動を開始しました。

デイコネス (deaconess) は日本語では女性執事とか、女性奉仕団員と訳され、男性のデイクン (deacon) に対照される働きを指しています。聖書の典拠はローマの信徒への手紙十六章一〜二節です。パウロは姉妹フェベをギリシャ語で奉仕者をさす「ディアコノス」と呼び、「多くの人々の援助者」とみなしました。フェベが病人や痛みのある人々になした奉仕は、後のメソジスト・ウーマンによってアメリカ都市産業社会における奉仕の模範と捉えられました。

ルーシー・ライダー・マイヤーはアメリカのメソジスト派のデイコネ

クシオンといわれる独自の組織体制の下、女性はソサイエティ、クラス (組会)、バンド (班会) という一連のシステムの中で活動しました。ジョン・ウエスレーの時代の女性には三つの特別な役割があつたことが指摘されています。それは、第一に、公の福音の語り手、第二に、巡回教師、第三に、女性支援グループのリーダーです。

十八世紀のメソジスト・ウーマンは、各ソサイエティで組織されるクラスやバンドで話し、祈り、証をし、奨励しました。キリスト教の一派であるクウェーカーは別として、女性が福音を語るという行為は、当時のキリスト教会の慣例に反し、メソジ

ス運動を展開した第一世代です。マイヤーは女性が伝道と奉仕に必要な技術やリーダーシップを訓練する必要があると考え、一八八五年にシカゴ・トレニング・スクールを開設しました。この学校は、シカゴの都市伝道・家庭伝道だけでなく、外国伝道のためのトレニングも含んでいました。そのスタッフとして協力した人の中に、インド伝道に赴いたイザベラ・ソバインやハル・ハウスのジェーン・アダムズの名前が認められます。シカゴ・トレニング・スクールは男性にとつての神学校とは性格を異にする、女性伝道者養成所のモデルとなり、そこから託児所、幼稚園、デイ・スクール、看護プログラム等を兼ね備えた施設が生み出されました。メソジスト監督教会の総会決議においてデイコネス聖職が認可されたのは、一八八八年のことです。

シカゴ・トレニング・スクールで訓練を受けた後、日本に派遣され、一八八七年から一八九二年に海岸女学校及び東京英和女学校で教鞭を執つた女性宣教師にメアリ・A・ヴァ

スト運動の内側でも意見が分かれました。しかし、ウエスレーは聖書の解説や釈義を女性が婦人集会の中で行うことの特別な意味を認めました。ウエスレーが女性を正式な説教者に任命することは決してありませんでしたが、ウエスレーによってクラス・リーダーの力を見出された女性は、巡回教師としてウエスレーの旅に同行し、サーキット・ライダーと呼ばれる巡回説教者やその妻に招かれてソサイエティを巡回しました。メソジスト・ウーマンはバンドで女性の必要に応え、女性同士の手紙のやりとりを通して精神的なサポートを行いました。

さて、アメリカのメソジスト監督会がいます。ヴァンスは女学校で音楽の教師として活躍しながら、日曜日に女学生を子どもたちのために奉仕する働きへと導きました。英語や音楽に特色を示したミッション・スクールは、その方面の教職の道を差し出しただけでなく、幼児保育や福祉事業へと卒業生を押し出しました。ヴァンスに続く日本人デイコネスの養成が期待されたことは容易に想像できます。一八九〇年の「日本メソジスト監督教会女性年会規約」の第二条(目的)をみると、次のように記されています。

「その目的は、女性海外伝道協会の代表者、親伝道局の女性、日本人デイコネスが協力して、日本の女性と子どものために最善可能な利益に資することである。」

以上のように、メソジスト監督教会の日本伝道の初期事業は女性による女性と子どものための事業であり、その流れを汲む青山学院の歴史の中に、時代を通じて変わらない愛と奉仕の精神が貫かれていることを覚えたいと思います。